

大乘非佛説論に對する世親の論破

山 口 益

大乘非佛説の主張は中國所傳の佛教資料では充分にそれを捉えることができず、ただ、大乘が佛説であることを辯護する點の片鱗が、漢譯の大乗莊嚴經論、顯揚聖教論、並びに成唯識論等において、窺知しえられるにすぎない。それで、曾て野澤靜證氏によつて、チベット大藏經丹殊爾部に收まつている唯識派安慧の大乗莊嚴經論註釋の初めの成立大乘品第一の場所と同じく、チベット大藏經丹殊爾部の、中觀派清辨の中觀心論の第四章聲聞眞實抉擇章とにおいて、その問題の論議せられたものについて、大乘非佛説及びその答辯の過程が仔細に紹介論述された。(大谷學報第二卷第三號)ここでは、チベット大藏經丹殊爾部所藏の世親造釋軌論第四章が、その問題を論議しているものについての解題的敘述を與える。

そこにおける大乘非佛説の主張は、聲聞乘から提起せられたもので、大乘が佛言であるとするのは、傳統的な十八部の傳承するところと相違するから、大乘は佛言でないという。その相違するとせられる點は、大乘經と稱せられるものには、「一切法が無自性、不生不滅」とか、または「色等の諸法は無である」などの所説があるが、それは、傳統説において、無明等の自性を説き、または諸行無常是生滅法などと説く處と相違する

からであるという。

それに對して、釋軌論の著者の世親の立場では、「諸經説の間の相違は、それらの經説が與えられたときの意趣を理解するならば、その相違でないことがわかるのであるが、若しその點を失して、諸經説の間の相違をあげつらうならば、傳統説の間にも相違が見出されるであらう」といつて、それについての事例を指摘する。

次に聲聞乘からは、大乘には、相違するものがないと決定せられる根據としての了義説がないであらうと徴難するのに對して、大乘者からは、「了義説がないということを確認するほど凡ての大乘經というほどのものを知つてゐるのか」と反駁し、聲聞乘から、「しかし、その凡ての大乘經なるものが現在には見られないではないか」と反詰するのに對して、大乘者から、「現在に見られないものがあるということ言えば、聲聞乘の經文にも現在見られないものがある」ということを多くの事例を以て指摘する。そして、「佛滅後に結集された聖典というものも、その結集物そのものが、現在では殘缺している。その證據には、聖教として受持せられている形態の中にも、四阿含とか五阿含とかの相異があるでないか。そのようにして、聲聞乘にも、凡てが佛言であることの確實性はえられないのであるから、大乘中に了義説が見られないからといつて、大乘に了義説がないと確執すべきでない」と反難する。

そして、聖教の理解は、文字通り、聲通りになされるべきものでない。文字通りに捉えようとすれば、そこに、多くの相違に遭遇する。また、文字通りに捉えるならば、大乘に言う一切法

無自性云々は、一切法撥無の邪見となつて、修道者の意志を喪失せしめることになる。故に大乘は、譬通りに捉えるべきものでなく、意趣のあるところを理解しなければならぬ、とする。すなわち、一切法無自性云々を文字通りに捉えるならば、その教説は修道者を誤まらしめる悪魔の所説となり、意趣のあるところを理解すれば、それは大乘の勝義であるという。そして、その大乘の勝義としては、それが無を説く無生法忍であつてもそこに慈悲喜捨の四無量という有情利益の方便をその内容として具えているのであるという。

それでは、大乘の了義説とは、どういうことであるかというに、そのために、釋軌論では解深密經の無自性相品の、三轉法輪を説示する直前にある、「諸法無自性不生不滅は意趣なくして説かれるべきでない」とする偈、並びに三無性を説く偈との二行の偈、及び梵文入楞伽經偈頌品中に見出される九行の偈を引用して、これらの了義説が理解せられずして、大乘に了義説なしと考えることは、輕躁であろうとしている。その入楞伽經偈頌品中の九偈は、すべて、三性説唯識義であり、特に三性説唯識義による入無相方便の言葉である。それらをもつて、大乘の了義説であるというのであるから、世親において大乘と言われるものは、解深密經無自性相品の、三轉法輪の第二時法輪から第三時法輪への歴史的な展開において、語られようとしているものが意味せられていることがわかる。

謠曲「菊慈童」の故事

三 木 克 己

わが國の謠曲と中國文學とが深い關係にあることは周知せられてゐる。「菊慈童」及び同一素材を取り扱つた「枕慈童」の二曲、(觀世流による。以下同じ。)も亦、この類に屬するもので、演ぜられることは、中國に關することである。他に「菊水慈童」というのがあつて、これは恐らく觀世流ではないと思ふが、その内容は「菊慈童」に比して、幾分詳細複雑になつてゐるものの、本質的な相違はなく、同一系統の曲である。従つてこれらはそれぞれ獨立の曲になつてゐるが相互に連關がある。梗概をいへば、魏の文帝（「枕慈童」に於ては後漢）の頃、南陽鄧縣の深山に慈童という者が住んでゐたが、彼は元來遙か古代の周の穆王の侍童であつた。しかし誤つて穆王の枕を跨ぎ越したため、鄧縣山中に配流されることになつたのである。その時慈童は山間におい繁つてゐる菊の葉に法華經の句を書きつけたところ、その葉から滴り落ちる露が谷川に流れ、その水を飲んだため慈童は不老不死の長壽を保ち、魏の文帝の時代に至つても、少年の如き容貌を保つたまま生き長らへてゐたといふのである。

この謠曲の典故として從來擧げられてゐるのは、太平記卷十三の「龍馬進奏の事」という章に見える記事である。そして太平記の記事の方が謠曲よりも一層詳密であり、これが「菊慈童」などの典故とする從來の説は正しいであらう。然らば一步進んで、太平記に記されてゐる物語は何に據つたのであるかとい